

月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12.末摘花

12- 1

16歳になった真紀は、山形市にある県下偏差値トップの山形東高等学校に進学した。西川町から山形市まで高速バスを使えば1時間で行ける距離間だったが、運行本数や時刻の制約に加えて、通学定期券を利用しても往復となると、月に数万円の負担になってしまう。

電車通学をしても乗り継ぎ等も含めて片道3時間近くかかる。

真紀は山形市内で『バー末摘花』を営んでいる伯母の持ち家に居候することになった。

志望校の選択肢については、親元を離れることも含めて2年前に義母になった朝子への気遣いもあったが、真紀には何よりもまず、学習環境を変えてアメリカ文学の勉強に取り組みたいと思う向学心が第一義にあった。

山形東高のあるエリアには山形工高、山形北高、山形大学小白川キャンパスがあり、県立図書館もすぐ近くにあった。

『バー末摘花』は、かつて山形を代表する和紙の里だった山形市の双月町で10年余りオーセンティックバーとして営業を続けていた。

山形市の盛り場は駅前と7日町の2つの区域に分けられていて、市役所に近い七日町には通好みや、敷居の高い店が多かった。

古民家をリノベーションした伯母の店は、山形駅から北西に2キロほどに架かる馬見ヶ崎橋を渡って300メートルばかり行った住宅街の中にあった。

雑木に囲まれたアプローチをぬけると、店の入り口に韓紅色の紅花染めの綿布に横書きでバー末摘花と白抜きされた暖簾が掛かっていた。

亡くなった母の姉にあたる松島彩は、独り身の40半ばの色白美人で、実年齢より若く見えた。

二人姉妹だったせいで、夭折した両親の実家に戻った松島彩が、お洒落な今時のバーに改修した訳を、実妹さえも知らなかった。

紅花紬の着物姿でシェーカーを振る彩の美しい身のこなしは、多くの上質な常連客を掴んだ。

噂を耳にした七日町でオーセンティックバーを長年営んできたマスターが注文したウオッカ・ギムレットの出来栄えに舌を巻いたと言う話から、シングルモルトにうるさいドクターがバックバーに並んでいる銘柄のラインアップに思わず唸ったと言う話まで、『バー末摘花』に纏わる世評は謎めいていて、美貌の女性バーテンダーを絡めて枚挙にいとまがなかった。